



「私にもできる」という支援

～地域支援活動を通して繋がった新しい役割～

日常生活自立支援事業(以下、日自事業)は、認知症高齢者や知的障がい者、精神障がい者など判断能力が不十分な方が地域で自立した生活を送れるように支援する制度です。この事業は、利用者と契約を結び、福祉サービス利用援助や日常金銭管理を行います。

利用者が安心して生活を維持するだけでなく、地域とのつながりや社会参加への一歩を後押しする大切な役割を担っています。今回は、大東市で支援を受けながら地域で新しい居場所と役割を見つけた方と、その方々を支える専門員の活動を紹介します。



上島 久典さん

上島久典さんには、発達障がいの特性があります。約2年前に日自事業を契約しました。

契約する前の生活を振り返り、「給与をもらっても全部使ってしまう、自分で金銭管理する自信はなかった」と上島さんは話します。

大東市社協(以下、市社協)の専門員、宮本健一さんと辻本奈央さんも契約開始してすぐの頃は、支援計画で決めていたお金をすぐに使ってしまう、毎日のようにお金を引き出してほしいと依頼があった」と当時を振り返ります。

しかし、日自事業を契約後、現在の就労先に勤めるようになり、ボランティア活動に取り組むようになってから、少しずつお金の使い方や生活習慣が改善されました。

現在も、上島さんは市社協を訪れ、生活費などを受け取っています。「今も自分で管理できる自信はないですが、これから自分も、もうちょっと頑張らなあかん」と上島さんは話します。

「私にもできた」という経験が次の活動に

現在、上島さんは働きながら、市社協が実施する地域の活動拠点「RiBBON」でボランティア活動



市社協 辻本奈央さん(左)、上島久典さん(中)、市社協 宮本健一さん(右)

変わるようになったことがきっかけで、日頃の情報交換が活発になったそうです。上島さんが大切にしている「みんなとの会話」が、市社協の職員同士で話すきっかけにも自然とつながっています。

支えることができるように

市社協では年々、日自事業の利用者数が増えています。これからさらに増える利用者をしっかり支えることができるように、自分たちのスキルアップも必要だと宮本さんと辻本さんは意気込みます。

RiBBONで活動している上島さんのようす

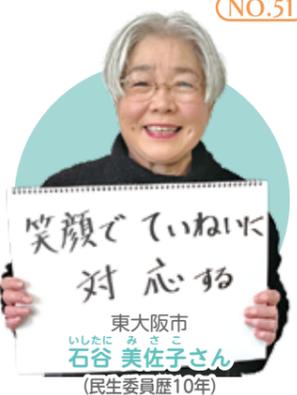


市社協内では、業務内容の違いなどから、他の担当職員と交流が少ない時もありました。しかし、上島さんがRiBBONに関

地域で活躍する

民生委員・児童委員さん

(NO.51)



東大阪市
みさき
石谷 美佐子さん
(民生委員歴10年)

このコラムは、地域で活躍する民生委員・児童委員(以下、民生委員)さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。今回は、笑顔とていねいな対応をモットーに、地域のつながりを大切にされる石谷さんにインタビュー。活動で大切にしていること、今後の抱負について聞きました。

● 自治会の経験から民生委員へ

以前、自治会の役員を務めており、地域の見守りネットワークの中で高齢者と関わる機会が多かったです。民生委員は、住民と社会の橋渡しをする存在だと知っていたので、深く考えずに民生委員を引き受けました。自治会での知識や経験も生かしながら、地域のつながりを大切に活動しています。

● 笑顔とていねいな対応で安心感を

初対面の高齢者は、詐欺などから身を守るために警戒心が強く、不信感をもたれることもあります。そこで、まずは相手に安心してもらえるよう、笑顔とていねいな対応を心がけています。現在80名ほどを担当

Q 質問数珠つなぎ

Vol.50 黒川さんから質問
人口の多い地域ではどのように地域と関わっているのか?

して、頻繁にはお会いできませんが、顔見知りの関係性だと本心話してくれますので、粘り強く関係づくりを続けています。

● 地域のなかでネットワーク強化

民生委員になって間もないころ、地域で暮らす高齢の方からの「めまいで倒れそう」という電話を受けて、自宅を訪問し、病院へ同行したことがあります。当時は社協や地域包括支援センター(以下、包括)に相談するということが浮かばず、一人で動いていました。民生委員の定例会では、そういった活動中の悩みごとを共有し、困ったときに相談できる社会資源の活用について話しあっています。現在は包括の職員とも密に連携が取れるようになり、支援のバトンタッチが円滑にできるようになりました。これからも地域の方との関係性を大切に活動していきます。

A 石谷さんの回答

日中は、広報誌や名刺のポスティング、周囲との情報共有。夜には歩いて、電気やテレビの音を確認するなど、顔の見えない見守りも実施しています。

「助かっている」の聲がやがて

「みんなとの会話を大切にしている」という上島さん。フードバンク活動に参加された方に「コーヒーを提供し、積極的に話しかけています。」
「ここにきて楽しんでもらえるようにしたい」という思いが活力になり、活動を続けています。参加者から「助かっている」といわれることが上島さんのやりがいにつながっています。



RiBBONの畑でサツマイモを収穫

頼もしい存在に

上島さんには、その日の出来事や不安に思ったことなどを社協に立ち寄り、話して帰るというルーティンがあります。はじめは、30分以上話していましたが、RiBBONでの活動に参加して

RiBBON

しています。はじめは、本人の希望で、RiBBONの畑の手入れや水やりやチャレンジしていました。水をあげすぎて苗を枯らすなど、上手くいかないことも多くありました。それでも、市社協RiBBON担当に助言をもらいながら、諦めずに野菜や果物を育て、収穫にいたりしました。「私にもできた」という経験がきっかけになり、他の活動にも関わるようになりました。

月1回のRiBBONでのフードバンク活動では、市社協に寄贈された食料品などを生活に困窮された方などに渡しています。上島さんは、来られた方に食料品を渡したり、仕分け作業をしたりする役割を担っています。